「仏教文明」から考える初期日本仏教

――「仏教文明」概念の導入試論――

保坂俊司

はじめに

仏教がキリスト教やイスラム教の如く、「文明」あるいは「文明圏」を形成してきたのかという点に関しては、S．ハンチントン氏の指摘にみられるように異論もある。さらに「文明」という言葉自体が、未だにアカデミックな領域において十分認知されていない概念である、という指摘もないではない。

しかし、それでも尚「文明」は、学問的な意味で豊かな広がりと、構造的かつ総合的な思考を可能にする概念を伴った言葉である。特に、宗教としての仏教を総合的かつダイナミックに検討しようとするとき、「文明」の概念は、大きな可能性を持つと思われる。ただし、ここで「文明」概念の詳細な検討は、残念ながら紙幅の制限上不可能であり、本小論においては図1のモデルを極簡単に解説するにとどめる。(1)

さて、筆者の文明モデルは、図1のように文明の各要素である生命・技術・経済・政治・文化領域が、宗教（各地域の宗教）とそれぞれ関わることで互いに有機的に連続し、決して独立的に存在するものではないという視点を基本とし、さらに、個々の文明は互いに関連性を持ちつつ存在し、それらの文明を統括する最大公約数的な存在として、普遍宗教（ここでは仏教）を共有する広大な文明圏を形成すると考える。図2

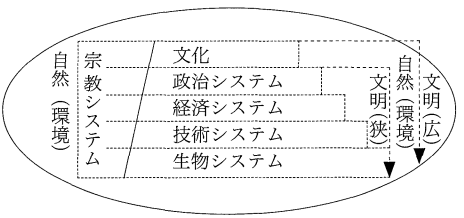
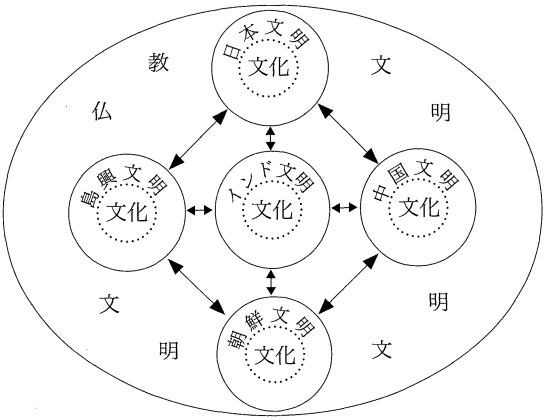


図1

この視点から仏教を中心に形成された各地の文化、さらには文明を有機的・総合的に検討しようとの試みが、筆者の目指すところである。つまり仏教研究に、政治・経済分野、言い換えれば社会科学的な視点を導入し、従来の人文科学系の研究と連関させ、仏教研究

印度學佛教學研究第五十四巻第一号　平成十七年十二月



（これは例示で、中心は他の文明でもよい）
仏教文明圏
（伊東俊太郎博士のモデルを参考としたもの）

図２

に新視点を導入し、さらに各地域の文化・文明の連続性に着目し、その影響関係のダイナミズムを総合的に考察する事こと を仏教文明・仏教文明圏という概念の導入は、可能にすると筆者は考える。

いずれにしても普遍宗教としての仏教の世界各地への伝播は、哲学・思想、あるいは文化等の人文科学分野の研究のみでは把握しきれない総合的な視点が不可欠であることは論を待たないことである。

また、紀元前後から十二―十三世紀の間永きに亘る期間、インド以東の東部ユーラシアから島嶼地域一帯には、仏教を中心とする仏教文明が形成されてきたことを承認した時、その中にはすでに中国文明のような独自の文明を形成した地域が含まれる。しかも、その中国文明といえども仏教を受容し、中国的仏教文明を形成していた。その意味で、中国文明の個別性とは別に、仏教を共有するとい共通性に着目すれば、中国も仏教を最大公約数とする仏教文明圏の一員という理解が成立する。そのように考えると仏教文明圏は、インド、中国、島嶼、朝鮮、日本の独自の文明を内包しつつ成立する総合的な概念である、ということになる。

以上を踏まえて、本小論では仏教の日本伝播について、文明としての仏教の伝播、あるいは逆に未開な日本が、高度な仏教文明を受容するという視点からこれを考察する。

日本への仏教伝播と仏教文明論的意味

「仏教文明」論の視点から、日本への仏教伝播について注目されることは、その初伝に象徴的に現れいる。つまり、『日本書紀』の欽明天皇十三年の記述の百済聖明王の仏教推挙のための上表文である。つまり「冬十月、百済の聖明王、西部姫氏達率怒唎斯致契等を遣して、釈迦仏の金銅像一躯中略・・・・・・（中略）且夫れ遠くは天竺より、爰三韓に洎る

までに、教に依ひ奉け持ちて、尊び敬はずということ無し。是に由ちて、百済の王臣明、謹みて陪臣怒唎斯致契を遣して、帝国に伝え奉りて、畿内に流く通さむ。仏の我が法は東に流えんと記まうを果たすなり」の記述である。すでに良く知られているように、この上表文は『日本書紀』編纂者による潤色があるとされるが、恐らく引用の部分は上表文そのままか、少なくとも当時の国際情勢や百済王の仏教認識を示している、と思われる。特に引用の部分である「西方の遠く天竺から東方のここ三韓に」至るまで、全ての国が仏教を信奉しているという記述は、沙門謙益が五二六年、中インドの常伽那寺からインド僧倍達多三蔵を伴って、百済に帰国したという事実を加味すると一層仏教文明圏の存在を明確にさせる。

つまり、当時の百済仏教においては、インドからの仏教の直伝の自負、仏教文明圏の一員としての自信、少なくとも海南ルートに依るインド仏教の直接的な影響を読み取ることが出来る。また、北伝ルートに属する高句麗仏教の歴史も古く、地理的にもシルクロードに近かったことも有り、中国を越えて中央アジアの仏教の直接的影響も認められるという。当時の朝鮮仏教は、仏教文明圏に属し、後世のように圧倒的な中国仏教の影響下にあるのではなく、インド仏教と直結していたのである。

そして朝鮮仏教の日本への影響は「仏教がはじめてわが国に伝来してから、約一〇〇年あまりの間、百済仏教と日本との関係は余りにも密接であった。天智帝の二年、百済が滅亡してからは、帰化人の渡来とともに沙門の来日も多く、日本の初期仏教は彼等によって拓かれたと見てよい」[2]というものであったという。

つまり、日本に最初期にもたらされた仏教は、中国一辺倒ではなく広くインドを見据えた広範な視点を持った仏教、つまり仏教文明圏を前提とした、あるいは少なくともそれを知り得た仏教であった、ということである。

それ故に、百済仏教や高句麗仏教、さらには彼らの国際感覚から直接影響を受けた聖徳太子の『十七条憲法』の第二条の「篤三宝を敬え。三宝とは仏・宝・葬なり。則四生の後帰、萬国の極宗なり。何世何人、是の法を貴ばざるはなし。」という視点が、生まれたのであろう。[3] つまり、仏教はあらゆる生命形態が最終的に拠り所とするもので、全ての国が共有する究極的な教えである、という認識である。

この言葉には、当時の国際情勢に於いて、仏教を通じて作られている仏教文明圏の存在への為政者としての強い憧憬を感じる。そのような事情を加味した上で、聖徳太子の隋への国書である「日出る処の天子、書を日没する処の天子に致す。恙無きや、云々」も考え必要があろう。つまり、中国文明の影響が強くなるにつけ、超大国隋に対して台頭名立場で認め

たこの国書を非礼である、として聖徳太子を非難する向きもあるが、これなども聖徳太子が、仏教の平等思想を基本に、仏教文明圏への参入を念頭に、隋との対等の立場を主張した、と考えれば決して非礼には当たらないであろう。というのも「（聖徳太子の）師の慧慈は、厩戸王子らに唐（隋ではないか？＝引用者付加）と対峙する高句麗の政治的な立場を伝授したものと推測される。[4]」というような事情もその背景もあったのである。

いずれにしても、仏教文明圏への参入を目指した聖徳太子であればこそ、仏教の平等思想理念に則って、あえて隋に対等な立場を取り得た、という視点も成り立とう。

仏教文明とバラモン僧正の来日の意義

さらに、日本の仏教文明圏参入において日本仏教を象徴する出来事として、バラモン僧正菩提僊那（七〇四―七六〇）や林邑の僧仏哲（不詳）の来訪は画期的な出来事であろう。このインド僧の正式な来朝は、仏教国として本格的に歩みだした八世紀初頭の日本人にとって、まさに日本が仏教文明圏の一員として認められた、あるいはその資格を得た、というような興奮を持って迎えられたはずである。それは『南天竺婆羅門僧正の碑文並びに序』によれば「しかるに今や（聖王）の徳が作りて、（神）異の人が至る。昌運起こりて大化盛なり。・・・聖朝が法を崇うの応たるなり。我等はここにこの運に逢う。中略、復この人を覩るに、蓋し各至〈極〉のまことを尽くして共に迎え。・・・道俗輻輳し、城にみち、郭に溢れ、幕をなす[5]」という表現からも髣髴される。

彼の存在は、仏教への思いを深くする新興国日本において、仏教の象徴的存在、日本人の仏教への憧憬を一心に集める存在であったのであろう。

ところが、バラモン僧正の活躍を示す文献資料は多くはなく、その日本への影響は不明である。しかし、彼の来朝と当時の日本仏教界の動きをあわせて考えると、興味深い点が浮き上がってくる。

つまり、バラモン僧正が、本朝に迎えられたのは恐らく七三三年に戒師招請のために興福寺僧栄叡・普照の両名が唐に派遣されたことと無関係ではないであろう日本の仏教関係者の間でも、より厳密な意味で戒師を求める意見が出たのである。[6]

恐らく、普照等の要請に応えて僧正は、弟子の仏哲を伴って、日本に渡ることとなったのであろう。しかも、彼の来朝以降、聖武帝の仏教への傾倒は一層強くなる。特に天平一五年の「大仏建立の勅」は、その先例を則天武后の奉先寺の大仏（西暦六七五完成）に見るにしても、バラモン僧正の存在も大きかったのではないだろうか。というのも、僧正はその伝

記である『南天竺婆羅門僧正の碑文並びに序』によれば、「華厳経を諷誦し、それを必要と為す。尤も呪術を善くし、弟子は承け習いて、今に至るもこれを伝う。[7]」というように、『華厳経』の専門家であった。しかも、僧正が旅してきた島嶼地域では、まさに『華厳経』が信奉されボロブドゥールの仏教遺跡などが、建設される気運が見られた時期でもある。つまり、この時代仏教文明圏において『華厳経』が信奉され華厳文化が花咲いていたのである。

この仏教文明のスタンダードをバラモン僧正は、日本に伝えたということになろう。いずれにしても、日本仏教の初期の時代には、日本は仏教文明圏に属し、世界的な視野で仏教文明を受容し、また独自の仏教文明を発展させていた、ということが出来る。だからこそ、空海のような偉大な宗教家が生まれたのであろう。しかし、日本が鎖国状態となり、中国のみにその目を向けるようになると、日本仏教は急速に矮小化し、仏教文明圏から孤立している。その証拠に、日本から天竺を目指した僧は正式には、空海の弟子真如法親王（七九九―八六五）以後、見られないということにも現れている。

以上のように、仏教文明圏という視点を導入することで多少なりとも仏教研究、特に初期日本仏教研究に益するものがあると、筆者は考える。

（この研究は、研究代表者前田專學「中世インドの学際的研究」（科学研究費助成・課題番号一四二〇一〇〇三）の研究成果の一部である。）

1 S.Huntington.*The clash of Civilizations and the Remaking of World Order*.Simon and Schuster.1996.pp.48-55.

2 鎌田茂雄『朝鮮仏教史』東京大学出版会、一九八七年、三ページ。

3 引用部分の「萬国」を「萬化」とする考え方もあるが、それでも意味がより哲学的になるだけで、仏教文明圏の視点から見ると、不都合は無い。

4 吉村武彦『聖徳太子』岩波二〇〇二、九七ページ。

5 中村元『東西文化の交流』（中村元選集九巻）昭和四〇年七七ページ以下。

6 家永三郎ほか『日本仏教史』（第一巻）法蔵館、昭和四二年、一四四ページ。

7 中村前出書。

〈キーワード〉 仏教文明、仏教文明圏

（麗澤大国際経済学部教授）

"the lesser vehicle" which the historical Śākyamuni preached in his time with "the great vehicle" which arose after the death of Śākyamuni by using the Huayan school's hermeneutical scheme of the five kinds of teaching. In his view, both kinds of vehicles become the one practical path to becoming Buddha. From a historical point of view, Fujaku's theory is the early modern Buddhist's answer to the problem that the historical Buddha could not have preached the Mahāyāna sūtras.

51. A Study on Japanese Buddhism from the Radius of Buddhist Civilization

Shunji HOSAKA

52. Bibliographical Study of *Yuzu Enmonsho*

Takashige TODA

The general headquarters of the Yuzu Nembutsu sect is located in the Dainembutsu-ji temple, in Hirano ward, Osaka.

The Holy Saint Daitsu (1649–1716) got official approval to re-establish this sect in 1688, the first year of the Genroku era, in the Edo period.

He achieved several things during his lifetime. For example, he published the *Yuzu Enmonsho* in 1703, the 16th year of the Genroku era, and the *Yuzu Nembutsu Shingesho* in 1705, the 2nd year of the Hoei era. The first one exists neither as an original book nor in woodblock form. The other exists only as woodblocks. However I have found the book name *Yuzu Enmonsho* in the *Danrin Shingi narabi ni Jo* of 1696, the 9th year of the Genroku era.

Bibliography has proved that the oldest written source is the printed book of the *Yuzu Enmonsho* from 1834, the 5th year of the Tempo era. It had a role regarding permission to enter the sect, as any person who wanted to enter the sect had to memorize the *Yuzu Enmonsho*.

53. Priest Jōkei and his Faith in Prince Shōtoku in Light of the Materials in